

優秀賞

我が家

あいち造形デザイン専門学校 高等課程 3年 安藤 麗花

「こんな家、出ていってやる。」そう啖呵をきって母の元を離れてから一年が経った。昔から私と母は反りが合わず、喧嘩をすることが多かった。弟妹はそんな私達を、何も言わずに黙って見ていたが、内心は呆れていたのだろうと今になって思う。良い娘にも、良い姉にもなれずに家を出た私に、居場所はもう、無くなっていた。

私はその後、十年前に母と離婚をして家を出ていった父と一緒に暮らすことになった。父には新しい家族がいて、私は、他人の家に土足で上がりこむような後ろめたさを覚えながら、新しい一家に加わった。遠慮がちに食事を摂り、何も強請らず、自室で一日中勉強をして、休日はアルバイトへ行く。機械的な生活を送り、談笑することなど殆ど無い私に父達は次第に戸惑い、そして私もまた、機械的な生活から抜け出す術を失っていた。

母達と離れて半年が経った頃、私は母がいない間に母の家を出入りするようになっていた。飼い鳥のルリと、弟妹のことがどうしても忘れられなかったからだ。案の定、私だけでなく弟妹も同じ気持ちだったのか、いつもでは考えられないほど甘えてきた。ルリですら普段は嫌がるスキンシップを許してくれた。そんな私の隠れた訪問が続き、心に余裕が生まれたのか、次第に父の家でも人間的な暮らしになりつつあった。

そしてこの訪問において私が唯一恐れていたことが、ある日現実となって訪れた。母の家で母と出くわしたのだ。「怒鳴られる」そう思ったが全て杞憂だった。母の発した「おかえり」という一言が全てを物語っていた。

これ以来、私と母は一切の喧嘩をしていない。お互いの空白時間で自分を客観視し、問題について深く考察したことで少し、大人になれたのだと思う。

失敗をして、客観視を繰り返すことで、私達は次第に大人になっていくのだ。

私には、大切な我が家が二つある。